April
号外
2018

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞
上町台地
今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム
vol.9 Document
UEMACHIDAICHI KONJAKU TIMES

企画・編集　U-CoRoプロジェクト・ワーキング／発行　大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
問合せ先　tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）※U-CoRo＝ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
ホームページ　http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

第9回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。

〝知〟の舟を漕いで 上町台地発、〝本〟をめぐる時空の旅へ

～ことばと本を愛する人たちの迷宮都市再び～

今回のフォーラムでは、書誌学者として近世・近代の大阪資料を幅広く蒐集され、上町台地と“本”をめぐる世界の豊かさを誰よりもご存知の、肥田晧三氏に基調講演をいただきました。さらにトークセッションでは、橋爪節也氏の導きで、本来、本を愛する人たちの迷宮都市だった大阪と上町台地へと分け入り、また今も残る路地のまちでことばを紡ぎ、ことばの森で子どもたちの心身を育む、藤田富美恵さんと塙狼星さんのお二人の実践に学ぶことができました。最後に会場のみなさまと意見交換。ともに“知”の舟を漕ぎ、上町台地発、本のまち・大阪の次のページを見つめる機会となりました。

■日時：2018年3月4日（日）14：00～17：00
■場所：大阪ガス実験集合住宅　NEXT21
　2階ホール（大阪市天王寺区清水谷町6-16）
■主催：大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
　企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
■プログラム：
　基調講演　講師 肥田晧三氏（元関西大学文学部教授）
　トークセッション
　　コメンテーター
　　藤田富美恵氏（童話作家）
　　塙　狼星氏（空堀ことば塾主宰）
　　肥田晧三氏（前掲）
　　コメンテーター兼コーディネーター
　　橋爪節也氏（大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科教授兼任）

▲壁新聞
「上町台地 今昔タイムズ」第9号（1面）

過去と現在を行き来しながら未来を考える「上町台地·今昔タイムズ*」第9号のテーマは「はじまりは上町台地“知”を運ぶ本のまち・大阪の軌跡をたどる」です。
古代世界に開かれた最先端の“知”の港に始まり、近世・近代には時代に先駆けた“知”の開拓者や媒体を生み出したまち・大阪を振り返り、その原点・上町台地からこれからのありようを問うています。
＊プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

U-CoRo
Step 2
壁新聞プロジェクト
関連イベント

❶『大阪商工銘家集』（1846年）に描かれた『摺物所』店頭、大阪市立図書館デジタルアーカイブより、❷幕末の地誌『摂津名所図会大成』（『浪速叢書8』1928年所収）の挿絵、賑わう心斎橋筋の書店街、❸プラトン社の文芸誌『女性』（1923年11月号）、❹手塚治虫の初期作品『新寶島』の表紙（小学館刊の復刻版、初版は1947年、育英出版刊）

●基調講演〈ダイジェスト〉

上町台地から本をめぐる時空の旅へ

肥田晧三氏（ひだ・こうぞう） 元関西大学文学部教授

1930年大阪島之内生まれ。大阪府立高津高校中退。大阪府立図書館、関西大学図書館の非常勤嘱託、関西大学文学部非常勤講師を経て、同教授。専攻は、書誌学、近世文学。上方文化の碩学、なにわの生き字引として知られる。著書は『上方學藝史叢攷』『上方風雅信』ほか多数。

掲載図版提供 肥田晧三氏

大阪で最も歴史の深い土地

今日は、上町台地の話を上町台地の会場で話させていただきます。上町台地という土地は大阪でも最も古いところで、ここには歴史が凝縮されています。この地の豊かな文化というものについては、お話が尽きるということがありません。

今日は、明治時代の幸田露伴（1867～1947）と尾崎紅葉（1868～1903）、後に日本を代表する明治文学の代表的な作家の二人が期せずして、大阪の上町台地の誓願寺（上本町西4）の井原西鶴（1642～93）のお墓に青年時代にお参りに来たことを中心にして、上町台地に関するお話をさせていただきます。

古くから人が行き交う土地柄

鎌倉時代に西行法師（1118～90）が上町台地を通っておられます。そのときに「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり」という歌を残された。

大阪湾に向かって広がる広大な葦原、これが大阪の原風景ですが、いまはその葦が枯れて、渺々（びょうびょう）とした景色になっている。しかしそこに早春の明るい日がさして、きらきらと海面が光るわけです。かつて見た美しい光景が夢のように思い起こされる。この名吟の残されたのは、我々大阪の人間にとって、なんとうれしいことではないでしょうか。

露伴、紅葉が訪れた西鶴の墓

明治22（1889）年、幸田露伴も尾崎紅葉も、この当時は数え年で22歳、ともに処女作を書いたばかりでした。幸田露伴は明治21年に「露団々（つゆだんだん）」、尾崎紅葉も「二人比丘尼色懺悔（にんびくにいろざんげ）」を書いて、明治の新文学の旗手として華々しく登場していました。これらは、新しい明治文学の出発点として、多くの読者に驚嘆の念を持って迎えられるんです。

それまで、皆が読んでいたのは、江戸時代の小説。範とすべきは曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」の文章だとされた。しかし、明治の新時代にこの文体はそぐわない。ではどうした文体を選ぶべきか。それが大きな課題やったんです。

そこで二人が日本の伝統文学の中から探り当てて、辿りついたのが、西鶴の作品でした。これから新しく文学をつくるときに、文体としては、西鶴を基にして、そこから明治の新しい文体をつくろうと決心したんです。

それではなぜ、この二人は西鶴を知ることになったのか。露伴は帝国図書館、今の国会図書館にあった西鶴の本を随分と勉強したんです。また当時、東京に淡島寒月という人がいましたが、彼は時代に先駆けて西鶴を評価し、自身でも作品を手元に持っておりました。その寒月と仲が良かったのが露伴で、彼の西鶴作品を借りて徹底して読んだわけです。紅葉も、露伴に遅れてですが、やはり淡島寒月から西鶴の作品を教えられたんです。

二人の青年は西鶴の文章にいたく惹かれるわけです。そして、露伴の「風流仏」、紅葉の「二人比丘尼色懺悔」が出る。これは西鶴の模倣ではなく、明らかに今までの文学になかった新しい文体。二人は明治の新しい文体というものをそこでつくったということです。

その後、露伴は『都の花』に「露団々」を発表し、その原稿料をもらうと、ぷいと東京を離れて、中山道を通って大阪へ向かいます。そして大阪上本町の誓願寺にあった西鶴の墓に参るんですわ。

ところが、西鶴の墓を探し求めても、住職もどこにあるのかを知らない状態。そこで墓地内を探していくと、なんとその墓は無縁墓の中にあったんです。そこで、露伴は住職に供物を出して、お墓をちゃんとしてほしいと言い、香を焚き、水を手向け、卒塔婆を立てて去るわけです。それが、明治22（1889）年の1月のこと。その卒塔婆には、

「元禄の奇才子を弔ふて
　　九天の霞を洩れてつるの聲」

と書いた。

紅葉も、同じ明治22年の8月に西鶴の墓を訪れ、「為松寿軒井原西鶴先生追善」と書いた卒塔婆を残した。

では、紅葉はなぜ大阪に来たのか。明治22年というと、大阪では、心斎橋北詰にあった駸々堂書店が新しい文学のシリーズを大阪で出そうと意気込んでいる最中やったんです。東京では吉岡書籍店の「新著百種」の第1号として新文学の新星、尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」が出された。露伴の「風流仏」もここから出ています。駸々堂もこれにならって「新著叢詞」というシリーズを企てます。大阪で新しい文学の狼煙を上げようとする。この駸々堂の招聘に応じ、若き紅葉が大阪にやってくるんです。

ちょうどその時に駸々堂が出していたのが『百千鳥』という雑誌ですわ。これは文学雑誌ではなくて講談や落語の速記などを載せたもんですが、創刊号の巻頭に尾崎紅葉の文章が載っています。「京大阪一覧」のその一というものです。大衆雑誌の巻頭にばりばりの新進作家が書いていますのや。駸々堂としてはとにかく紅葉に書いてもらい、「新著叢詞」の第1回作品として出したいという思いがあった。この雑誌は、明治22年の9月に出版されたもんです。だから8月の時点では、これの印刷が進んでいる途中。そんなことがあって、二人が期せずして文豪西鶴の墓に参っているわけです。

二人の来訪に驚いた大阪の青年記者

大阪朝日新聞の青年記者だった木崎好尚は、後に頼山陽や田能村竹田の研究で知られるようになる人です。この人が、明治22年にやはり誓願寺に行くわけです。すると新しい卒塔婆が二つ西鶴の墓に立てかけてある。一つは幸田露伴、一つは尾崎紅葉。それで、大阪の青年がびっくりするんです。東京の輝かしい新進の作家二人がここに来ている！大阪の自分たちはちっともお参りせんのに、あの二人が西鶴の墓にお参りしていると。そして明治22年11月に、東京の読売新聞に「西鶴の墓」という題で書くんです。

露伴もまた、「井原西鶴を弔ふ文」という題で、明治22年11月に雑誌『小文学』に発表します。

「今や露伴幸に因あり縁ありて、
　茲（ここ）に斯（ここ）に来つて翁を吊へば、墓前の水乾き樒枯れて、鳥雀いたづらに噪ぎ塚後に苔黒み、霜凍りて屐履の跡なく、北風恨（うらみ）を吹て日光寒く、胸噫（ふい）悲（かなしみ）に閉ぢて言語迷ふ。噫世に功ありて世既に顧みず、翁も亦世に求むるなかるべし。翁は安きや、翁は笑ふや、唯我一炷（わが）の香を焚き一盞の水を手向け、我志をいたし、併せて　句を誦す、翁若し知るあらば魂尚饗（こんなほうけよ）。
　九天の霞を洩れてつるの聲　露伴」

露伴一流の華麗な文章です。これも、西鶴の影響を受けた文章と思われます。

紅葉の方も、明治23（1890）年5月「国民新聞」に「元禄狂」という題で書く。西鶴に心酔しているということを書き、その中で、「明治二十二年八月、大阪八丁目寺町誓願寺に、西鶴翁の墓に詣でゝ」と記し、「ででむしの石に縋りて涙かな」という句も詠んだ。

後に、日本文学を代表する大文豪になるこの二人が、青年のときに、期せずして大阪に来たわけです。

露伴、紅葉を導いたのは馬琴

では、二人は大阪の誓願寺に西鶴の墓があることをなんで知っていたのか。もちろん二人とも大阪には不案内。実は、明治18（1885）年に出版された曲亭馬琴（1767～1848）の京大坂の旅行記『羇旅漫録（きりょまんろく）』を読んでいたんです。これは、享和2（1802）年に、馬琴がまだ無名の青年だったときに京大坂を旅して書いたものですが、滝沢家にずっとあったままで、彼の生前には本になっていません。内容はとても良くって、若き馬琴が、京大坂で感じたこと、また名所旧跡やいろんな人に会った印象をとても詳しく書いています。この本の中に、馬琴が西鶴の墓に参ったことが書いてあるんですわ。

「西鶴が墓誌
　西鶴が墓は。大坂八町目寺町誓願寺本堂西のうら手南向にあり。〈三側目中程〉七月晦日盧橘と同道にて古墓をたづぬ。はからず西鶴が墓に謁す。寺僧もこれをしらざりし様子なり。花筒に花あり。寺の男に何ものが手向たると問ふに。無縁の墓へハ寺より折折花をたつるといふ」

曲亭馬琴の京大阪旅行記『羇旅漫録』（明治20・1887年2月刊）

墓の絵も馬琴が採録したもの。「棹石高サ二尺余ヨコ一尺臺石高七八寸」。表面の文字は「二尺八九寸」で、「仙皓西鶴」、側面に「元禄六癸酉年八月十日」とあるのをそのまま写しています。この本は江戸時代と同じ木版本で明治18年に出ましたが、20年に活字版が出ました。

紅葉も露伴もこの『羇旅漫録』が出たときにちゃんと見ているんです。大阪にこんなところがあるということを知っていたので、大阪に行ったら、墓にお参りしようと。そういう気持ちをきっと早くから持っていたんです。

馬琴を紹介した大田蜀山人

馬琴が西鶴の墓に参ったその一年前に、あの大田南畝・蜀山人（1749～1823）が、西鶴の墓を訪れています。彼は幕臣。禄高や身分は高くはないのですが将軍直属の御徒（おかち）でした。彼は享和元（1801）年に、銅会所の役人として大坂に赴任したんです。大坂では、住友がおびただしい銅を精錬しましたし、住友以外にも銅商人が多く、大坂の銅は幕府にとっては極めて大切な財源でした。

『羇旅漫録』記載の西鶴墓碑

その銅座会所があったのは、今の北浜の愛珠幼稚園があるあたりですな。蜀山人は、江戸から単身でやって来て、御堂筋と本町が交わるあたりにあった幕府の官舎に1年間滞在したんです。彼は、非常に知識欲が豊富で、大坂の名所旧跡、行事を見て回った。それを、「葦の若葉」という日記に記したのが写本として後の世に伝わっているんですわ。明治の末に蜀山人の全集が出版されていますが、そのときにはじめて「葦の若葉」が活字になったんです。

これを読んでみますと、その中に、彼も西鶴の墓に参ったという記述があるんです。

それは、享和元（1801）年4月のこと、「寺町をすぎ誓願寺に入る、甃庵中井先生の墓あり、（中略）　此寺に西鶴か墓ありと書肆山口屋かいへるによりて墓はらふ下部にとふに志らず、つらつら墟墓の間を見るに一ツの石あり、仙皓西鶴と忞れり」

蜀山人は、誓願寺で懐徳堂の一族の墓に参り、そのあとに西鶴の墓にもお参りしたんです。本屋の山口屋が、ここに西鶴の墓があると蜀山人に教えたわけなんですが、西鶴が元禄6（1693）年に亡くなって百年も経っておりまして、その当時はもう、大坂で西鶴の墓はほとんどの人が所在も知らなかったということでした。それが、大坂の本屋仲間では、西鶴の墓は誓願寺にあると、ちゃんと言い伝えてきていたということです。

馬琴が大阪に行くのは、その翌年。蜀山人からの紹介状をもらって会った田宮盧橘という人に案内してもらいました。馬琴はこの盧橘に西鶴の墓の場所を教えられたわけです。そういう関係で、埋もれていた西鶴の墓が、江戸を代表する二人の文人に、そして明治の東京の新進の二人の大スターにも、関連をもつことになるという次第です。

この盧橘という人は著述家。非常に筆が立って、手早くいろんな著述をなした。だから大坂の本屋は、売れるものだからと次々に出したそうです。あの馬琴

百年の大阪
相つぎ露伴、紅葉
無縁墓地から改葬

露伴と紅葉が西鶴の墓に参ったことを記した読売新聞「百年の大阪」の記事（昭和41・1966年）

をして、盧橘は著述をして家族五人を養っているが、これは江戸でもそういう人はいないとびっくりするんです。『羇旅漫録』の中にそう書いてあります。後に馬琴は、『南総里見八犬伝』などを次々に著す大著述家になるんですから、世の中というのはわからない。そういうことを考えたら大変面白い続柄がこの人たちにはあると言うことですな。

実は、紅葉、露伴が西鶴のお墓にお参りした顛末には、私は随分以前に気がついていました。今年は明治150年ですが、昭和43（1968）年は明治100年の年で、その2、3年前から明治100年の回顧というのがいろんな方面で始まったんです。毎日新聞では「大阪百年」、読売新聞でも「百年の大阪」という連載が始まっていて、昭和41（1966）年に私が担当の記者さんに、明治22年に紅葉と露伴が西鶴の墓にお参りしているということをお伝えし、載せていただきました。

鉄幹の手紙と晶子の返歌

明治時代に『手紙雑誌』というのがございました。故人や今活躍している人の手紙や通信文を載せるものです。明治36（1903）年から出だして、10年ほど続きました。葉書の写真があり、下に本文がある。江戸時代の人の手紙もあり、とにかく、手紙ばかりが出ている、とても変わった雑誌です。

この第2号に1枚の葉書が載っています。与謝野鉄幹(1873〜1935)の葉書です。厳島や宮島に行ってこんな歌を作ったと、東京の友に出したものです。

文中に「關西文學會の酔茗外諸氏とちぬの浦住の江等に遊びて」とあります。関西文学会の河井酔茗は堺の人。同じ堺の与謝野晶子（1878〜1942）とは親友やった人ですな。関西文学会は晶子らがともに組織したんです。鉄幹はその人たちとも早くから仲がいい。行ったのは、おそらく浜寺公園ではないかなと思う。

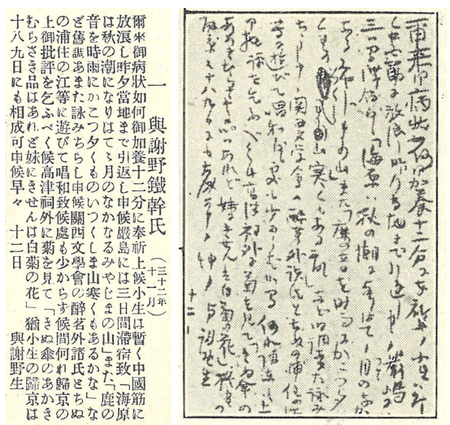
その次に「高津祠外に菊を見て」と書いてあります。高津さんのほとりで菊を見て、歌を詠んだ。

「きぬ傘のあかきむらさき品はあれど妹にきせんは白菊の花」

明治32（1899）年11月12日のことです。

高津さんの表門を出て東へ行く、谷町筋を越えたあたりに翫菊庵という菊の名所がありました。明治時代、ここには秋になったら、鉢植えの菊がきれいに

『手紙雑誌』第1巻第2号（明治37・1904年4月20日）



『手紙雑誌』第1巻第2号に掲載された与謝野鉄幹の葉書と活字文

「高津翫菊庵」長谷川貞信（『上方』第70号 昭和11・1936年10月）

並べられた。赤い毛氈を敷いた床几がずっとあってね。大阪の人たちの秋の遊覧場所でした。雑誌『上方』の70号の表紙に長谷川貞信が翫菊庵の絵を描いています。その絵を見るだけで賑やかな様子がよくわかります。鉄幹がそこで詠んだのがこの白菊の花の歌です。

「きぬ傘」は絹を張った傘で、貴人に差しかける傘、それを差し掛けるように、赤や紫の美しく咲いた菊はあるけれど、凜とした白菊こそを我が愛しい人にかざしたいのだという歌です。では、その妹とはいったい誰なのか。

甲南女子大の菊池真一先生が、与謝野晶子の研究で大阪の毎日新聞の古いものをお調べなさった。古い新聞には晶子の歌が随分出てるんです。しかも、それらは晶子の歌集にほとんど入っていない。菊池先生はそういうものを集めて発表された。それを拝見していたら、そのなかの次の歌に目が止まったんです。

「久しくも京大阪に帰らぬをしら菊さけば嘆かるゝかな」

明治44（1911）年10月1日の新聞。これを見たとき私ははっとしました。時間はだいぶ経っていますが、鉄幹の歌とこの晶子の歌は照応している。

「妹にきせんは白菊の花」の「妹」は晶子です。晶子は鉄幹と駆け落ち同様に家を出て、それ以来、終生堺の家に帰ったことがない。それでも晶子の心には故郷の堺のことがある。それで「久しくも京大阪に帰らぬを」というように、ほんとうに京大阪には長く帰らないけれども、白菊が咲く季節になったら望郷の思いで胸が裂けそうになると。

私は、晶子の歌をずうっと見てきて、この歌を見つけたときに、うわっと叫びました。鉄幹と晶子、この二人の間に交わされた何とも言えん思いや情愛が浮かび上がってきます。上町台地のことを語ると、こんな素晴らしい話があるんです。皆さんにそういうことをぜひ知っていただきたい。

連綿と続く大阪の出版の系譜

明治36（1903）年に大阪で第5回内国勧業博覧会が開催されます。そのときに大阪の金尾文淵堂というところが、大阪案内の本として1月に『大阪名勝図絵』の巻之壱というのを出しました。

寛政12（1800）年に出た『摂津名所図会』は、長く大阪案内の祖として、皆が利用して非常に役に立つ大切な本でした。ところが1900年代になって、その内容がもはや古くなったと思われたのかも知れません。そこで金尾文淵堂が新しく、明治の『大阪名勝図絵』を計画して出したんです。ところが思惑に反して、これが売れなかった。全5冊の予定が、結局一巻だけで終わってしまいました。

この一巻が上町台地のことだけを紹介してまんねや。中味はちょうど大阪城から上町台地の名所旧跡を載せている。

金尾文淵堂は江戸時代からある本屋で、仏教の本などを出していました。明治時代になると、主人の金尾種次郎が非常に新しものがり屋で、当時の文学青年たちと仲良うして『小天地』とか『ふた葉』とか新しい文芸雑誌を出したり、薄田泣菫の『暮笛集』を出版したりしています。ともかく若い新しい文学者と一緒に新しいことをしようとしていた本屋さんです。こういう出版元が大阪にあった。そういうことなどもいろいろと思い浮かんできますな。

金尾文淵堂刊『大阪名勝図絵』巻之壱（明治36・1903年1月）

肥田先生の上町台地 とびきりのもう一言 ❶

●大阪の名玩、生玉人形

ここに展示させていただいておりますのは、生玉人形です。これは、昭和初期に購入した生玉人形で、いろんな種類、全部で7体あります。とても傷んでしまってますが、みなさんにぜひ見ていただきたい。

それから、今、大阪くらしの今昔館で、生玉人形を新しく復活させようと、ボランティアのみなさんがつくってくださっています。今日は、それもお持ちいただいた。とてもよく出来ています。一緒に飾らせていただいています。

生玉人形は、大阪の名玩で、とてもいい人形。今は滅んでしまっているのがほんとうに惜しい。現在こうして復活の機運が出てきて、私はとても喜んでいるんです。

今、生玉さん（生國魂神社）で毎年落語家さんたちが「彦八まつり」を盛大にしていますが、この生玉人形は、生玉さんで江戸時代に活躍して、上方落語の祖と言われる米沢彦八を人形にしたものです。大阪の土地や芸能にもゆかりが深いもので、生玉人形は、大阪の郷土玩具としては、とても優れたもの。大阪の大切な文化財のひとつやと思います。

●トークセッション〈ダイジェスト〉

ことばと本を愛する人たちの 迷宮都市・大阪と上町台地再び

コメンテーター　藤田富美恵 氏（童話作家）
塙　狼星 氏（空堀ことば塾主宰）
肥田皓三 氏（元関西大学文学部教授）

コメンテーター兼コーディネーター　橋爪節也 氏
（大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科教授兼任）

■「本のまち・大阪」はラビリンスだったのか

橋爪節也 氏（はしづめ・せつや）
大阪大学総合学術博物館教授／
大学院文学研究科教授兼任

1958年大阪市生まれ。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員、大阪大学総合学術博物館館長などを経て現職。美術史研究にとどまらない観点から近世・近代大阪を探究。編著書に『モダン心斎橋コレクション』『大大阪イメージ』など。

「大阪市パノラマ地図」（大正13年）は、モダン大阪の鳥瞰図。都市化が進む大阪市街の迷路性が表象されている。上の図は部分（谷町六～空堀界隈）

●イメージの大阪を疑ってみる

かつての大阪が「本のまち」だったのは史実であり、それが喚起する迷宮性を伴う都市のイメージは、大阪の文化を考える上で重要なものだと言えます。

往々にしてまちはイメージで語られます。大阪も、いろんな言い方をされてきました。誰が呼んだか「東洋のベニス」とか、中之島は「東洋のシテ島」だとか。江戸時代の「天下の台所」も、誰がいつから言ったのか。「水の都」や「煙の都」もそう。「東洋のマンチェスター」というのもあります。そうしたイメージとして大阪を捉えるとき、「本のまち大阪」は、文化都市の記憶を呼びさまして、強いインパクトをもつものでしょう。

●アニマル柄、多いのは東京？

大阪では、アニマル柄の服が多いとよく言われる。しかし、博報堂が以前10万人近くを対象にアニマル柄の服やバッグを身につけている人を調査したら、

2005年　大阪3.5%　東京4.5%
2009年　大阪2.4%　東京2.8%

ちょっと古いが、東京の方が多かった（笑）。にもかかわらず、大阪が多いとみんながそう思っている。大阪の人は親切心があるので、だんだんみんながアニマル柄になってきたのかも？（笑）

我々が大阪について考えるときに、史実というものと、イメージ、あるいは記憶の中の大阪というものがある。

歴史としての大阪は、実際に「本のまち」だったし、また記憶としての「本のまち」も、まだ年配の方にはあるはず。古書街があったとか、本屋がたくさんあったとかの思い出。あるいは、著述家がいたとか、蔵書家がいたという記憶。

ただ、「本のまち」と言うと、文化都市だと言っているような感じで、大阪人はそういうのはどうも照れくさい。そんな大したもんやおまへんで、とつい言ってしまう。

大阪ガス エネルギー・文化研究所の「CEL」118号で池永所長が「文化とは出汁（だし）だ」と力説されている。昆布とかいりこ（いりこ）とかを使ってまず出汁を取る。出汁がきいていないと美味しい料理は出来ない。これはつまり、大阪が良くなるには、出汁としての文化をちゃんと大事にしないといけないということにほかならない。

一方、出汁には秘伝の出汁というものがあり、それは後世に伝えないといけない。一代きりで、自分で使い果たしてしまって、いったいどうするのか。同じ意味で、「本のまち・大阪」の奥深さを我々は伝えていくべきでしょう。

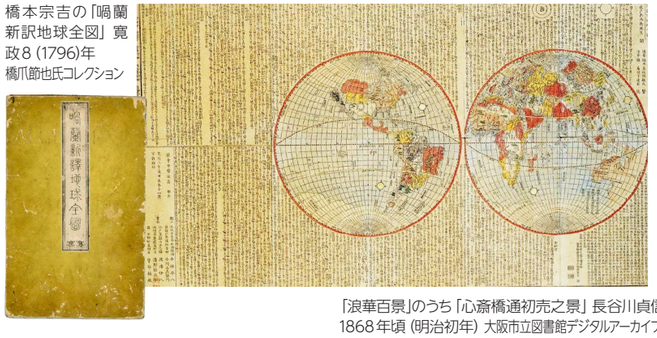
●江戸時代の大坂も「本のまち」

話を少し戻してみると、江戸時代の大坂は、まさに「本のまち」でした。それこそ奥が深く、捉えきれない迷宮性を帯びたもの。その一端を紹介します。

有名な蔵書家、木村兼葭堂（けんかどう）（1736～1802）の蔵書コレクションを見るため、同時代の多くの人が全国から彼を訪れた。「兼葭堂日記」に記された来訪者には、上田秋成や大田南畝の名もあるし、ほかにも司馬江漢、谷文晁、麻田剛立などの著名人が名を連ねている。

もう一つ重要なのは、彼は自分でたくさん本を出版したこと。「兼葭堂蔵板」というもので、例えば『六物新志』は、江戸時代随一の蘭学者と言われた大槻玄沢の本。このほかにもたくさんの本を兼葭堂が自費で出版した。

木村兼葭堂像
（谷文晁筆、享和2・1802年）



橋本宗吉の「喝蘭新訳地球全図」寛政8（1796）年
橋爪節也氏コレクション

「浪華百景」のうち「心斎橋通初売之景」長谷川貞信画
1868年頃（明治初年）大阪市立図書館デジタルアーカイブより

ほかにも、いろんな本が大坂で出ている。例えば、高麗橋にあった浅野星文堂は地図が得意で、寛政8（1796）年に橋本宗吉の「喝蘭新訳地球全図（おらんだしんやくちきゅうぜんず）」を出した。表紙に、オランダ語が入っている。大坂の本屋は、世界のことを知っていた。

この当時、心斎橋筋は本屋街だった。例えば、尾崎雅嘉の『百人一首一夕話（ひゃくにんいっしゅひとよがたり）』は江戸時代の大ベストセラーで、心斎橋筋の敦賀屋九兵衛から出た。百人一首について解説や絵解きをするもので、今では岩波文庫にもなっています。

また、心斎橋筋塩町にあったのが綿屋喜兵衛。「浪華百景」の「心斎橋通初売之景」に店頭が描かれているが、版元は綿屋喜兵衛で、自分のところ（笑）。

幕末・明治に道頓堀の日本橋南詰東入にあった本屋安兵衛は、いちびった本を次々に出す。例えば「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事」、蚤虱蚊が奉行の前でかしこまる絵入りの本もある（笑）。

●明治以降も続く「本のまち」

近代も心斎橋筋は書店のまち。私が以前に調べた地図を見ても、書店関係がずらりと並んでいます。三木開成館は今の三木楽器。元々は本屋だが、『山田耕筰歌曲集』など、楽譜類を出版するようになった。

それから、プラトン社。化粧品の「中山太陽堂」（現クラブコスメチックス）が、東区谷町5丁目乙20番地（現在の谷町5丁目）に設立した。大正11（1922）年に雑誌『女性』を出して、大正12（1923）年に『苦楽』を出す。

大正14（1925）年4月1日に大阪市は市域拡張をして「大大阪」となる。人口は、東京を少し越えて日本一になり、世界で6番目になった。このころに、大阪ではモダンな出版文化が栄える。

例えば創元社。昭和18（1933）年刊の谷崎潤一郎『春琴抄』の漆塗りの表紙など、装丁に凝りまくっている。横光利一の『時計』は昭和10（1935）年刊。表紙に金属板が張り付けてある。

逆にこのころ、大阪が大都会になっていき、古き良き大阪が失われていくことを危惧し、郷土研究雑誌が次々発行された。だるまやの『難波津』、上田長太郎の『大阪叢書』、木谷蓬吟の『郷土趣味 大阪人』、そして南木芳太郎の郷土研究誌『上方』という金字塔も出される。

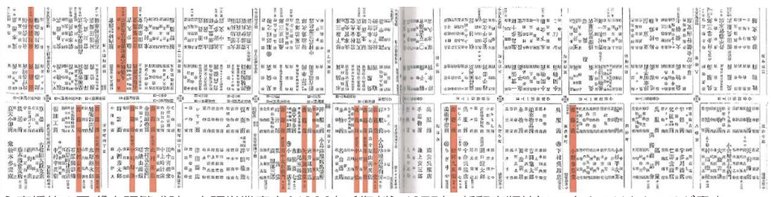
古書店もたくさんあって、天牛新一郎さんが『大阪弁』という雑誌に書いたものを見ても、堺筋の日本橋4丁目、5丁目に、古本屋がずらりと並んでいたことがわかる。これらの古本屋は、どちらかというと教科書を売ったりとかする店。

日本橋の南を東に入ると二つ井戸。そこにあった天牛書店は、写真を見ると天井まで本棚。こんな本屋は、今はもう、なかなかありませんな。

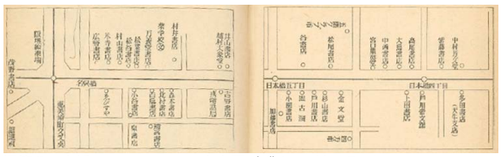
現在もある杉本梁江堂は、昔は上本町の近鉄の近く、今のハイハイタウンの南の一画にあった。古本屋になる前に、堂本印象の『いの字絵本 恋の都大阪の巻』を出している。印象が21歳の大正元（1912）年刊。夢二みたいな絵を描いた。

それから、三好米吉の柳屋が心斎橋から堺筋の間の八幡筋にあった。この界隈は古本屋というよりも、趣味系の本屋が集まったところ。

明治時代に心斎橋筋にあった青木嵩山堂を描いた銅版画
（『萬国名所図絵』明治19・1886年より）



心斎橋筋の図（『大阪繁盛誌・大阪営業案内』1990年〔復刻〕1975年 新和出版社）に、色をつけたところが書店関係（橋爪節也『モダン心斎橋コレクション』2005年より）



堺筋の日本橋4丁目、5丁目には古本屋がずらりと並んでいた
（天牛新一郎「日本橋の古本街」『大阪弁』第7集 昭和29・1954年の挿図から）

二つ井戸時代の天牛書店

この柳家の並びには、だるまや、荒木伊兵衛書店、移ってきた杉本梁江堂もあり、雑誌風の古書目録などがたくさん出された。こういう古本文化があった。

八幡筋の一本北の周防町にあった尾上蒐文洞（しゅうぶんどう）は、山口誓子の『宰相山町』という本の中に出てきます。誓子は真田山の近所に住んでいて、勤め先の住友からの帰りに心斎橋から周防町を東に歩いて、尾上蒐文洞に寄って帰った。

蔵書家としては、肥田先生のご親戚の肥田溪楓は、明治34（1901）年に南区久左衛門町の自邸に、洋風のモダンな書庫を竣工して「楓文庫」を開いた。

最後に松屋町。明治時代から、このあたりにも出版社がたくさんあり、戦後は赤本と言って、手塚治虫の『新寶島』などが出されています。

最近出た『大阪弁の犬』という本は、「がきデカ」を描いた山上たつひこの自伝。一時アメリカ村の炭屋町に住んでいた。安堂寺橋通りに日の丸文庫があり、そこで出していた貸本劇画『影』の編集に関係している。

このことからも、大阪は、近年まで、出版の奥が深いまちだったことがわかります。

山上たつひこの自伝『大阪弁の犬』2017年

付記　大阪の趣味人や趣味系の店については、橋爪先生は第7回「上町台地 今昔フォーラム」の基調講演で詳しく紹介されている。ドキュメントは UCoRo ホームページにて公開中。

■路地の暮らしとふれあいと、創作童話のお話

藤田富美恵 氏　（ふじた・ふみえ）
童話作家

1938年大阪生まれ。秋田實の長女。著書は『からほり亭で漫才！』などの童話作品のほかに『玉造日の出通り三光館』『父の背中』『秋田實 笑いの変遷』など。大阪市中央区の空堀に在住し、2017年に明治時代の長屋を改装したフリースペース「大大阪藝術劇場」を開設。

●嫁いだ先は、路地のまち

私は昭和39（1964）年に、からほりに嫁いできました。路地の多いまちで、まるで迷路のよう。私が嫁ぐときに父の秋田實が言ったのは「迷子になりなや」(笑)。「昔、あの辺の路地にスリが逃げ込んだら、巡査でもよう捕まえへんのや」と。

結婚して住み始めたのは、今から50年前ですから、冬は路地で日向ぼっこ、夏であれば涼んでいる人がいる。一歩外に出た途端に、「どちらへ」と聞きはる（笑）。結婚したては、律儀に「百貨店まで」とか答えていましたが、なんか見張りされているような窮屈な感じ。でも、慣れてきますと、「どちらへ?」ときかれても、「ちょっとそこまで」と（笑）。きく人もほんとは真剣にはきいていない。顔を合わせたら何かしゃべらないと気詰まりなんです。

そういう感じで路地に住んでいますと、ひとつの家族のようなもの。やはり仲良う、気持ちよう暮らさんとあかんなあと。そういう気持ちがだんだん生まれてきました。

●最初の本は路地での会話から

やがて子どもが3人生まれました。運動会が近づくと、「もうすぐ運動会やね」。路地では、そういう何でもない話題が多く、それで上の子がちょっと足が遅いので、「運動会嫌がってるわ」と言うと近所のおばあさんが、「私も嫌やったけど、親が足袋みたいなのを縫うてくれたわ」。それを聞いたとき、私も福井に疎開していた頃のことを思い出しました。昭和20（1945）年、終戦の年に福井で国民学校一年生に入りました。戦争は夏に終わり、秋には運動会があったんです。運動会はみんな裸足で走る。ところが、裸足で地面を歩いたことがない私は、足の裏が痛い。そのときに祖母が縫ってくれたのが、足袋みたいなものでした。そういうことをふっと思い出し、書いたのが『うんどう会にはトビックス！』です。

路地のお年寄りとのふれあいの中で、運動会を嫌がっていた子が、楽しく運動会をしたというお話でした。

●路地の良さを作品で伝えたい

それ以降、路地の良さを多くの人に伝えたいという思いが湧いてきて、次に書いたのが『あの子は気になる転校生』という作品。

私が住んでいる路地はコの字型で、一方から入って、右に曲がって、突き当たってまた右に曲がると、もとの表通りに出る。当時は、子どもらが学校から帰ってきたあと、友だちが、みんなうちの路地に来て遊ぶんです。鬼ごっこ、かくれんぼで、大騒ぎをして走り回る。花にボールをぶつけて折ったり、植木鉢を引っ繰り返したり。

そんなときに、お年寄りが教えてくださったのは、まず「謝りなさい」ということ。遊びに来た子も大抵は路地の子。おうちにもお年寄りがいて、みな言うことを素直に聞いていました。引っ繰り返した植木鉢を元に戻し、ほうきで掃いて、土も戻して、借りた如雨露（じょうろ）で水をやって、できる限り元に戻す。子どもたちは、そういう環境で大きくなりました。

●昔の風習をお話に書き残す

その次に書いたのは、『おっと千両イチゴちゃん』。当時、近くにお風呂屋さんがあって、私は上の子二人を連れて、よく一番風呂に行きました。だいたい3時前にお風呂屋さんが開くのを待って入る。まっさらの大きな湯船の中、高い窓からお日さんがさし込んですごくきれい。

そのときに私が知ったのは、お風呂に

空堀での暮らしや周囲の人たちとのふれあいをモチーフにして、藤田さんが創作してきた童話作品などの書籍

も入るルールがあることでした。常連のお年寄りが大勢おられるので、私たちがさっと入って、好きなところにすわったらいけません（笑）。常連さんの場所が決まっていましたから。そういうことも、だんだんに分かってきました。

帰る頃には、お風呂屋さんを出たところに、たこ焼き屋さんが屋台を出していました。そこのおじいさんがすごくいい人だったので、書きたくなった作品です。

タイトルの「おっと千両」は、父の父親、つまり私の祖父が、明治時代、お朔日（ついたち）の朝に起きると自分の寝ていた枕を担いで玄関に行き、表に向かって「おっと千両」と3回叫ぶ。そうするとその月は病気しないですむといい、それを習慣にしていたとのことでした。

昔の人は、お朔日をものすごく大事にしました。お仏だんの花を入れかえ、また商店街でお赤飯やお餅を買ってきてお供えする人も多くいました。そういう風習を伝えたくて書いた作品です。

●空堀商店街にあった澤井亭

空堀商店街は私の家からすぐ近くで、毎日買い物に行っていましたが、まん中あたりに澤井薬局がありました。

ある日、「ここは昔『澤井亭』という寄席やったんよ」と教えてくださる人がいました。私は演芸のことに興味があったので、以後、行くたびに店主の澤井さんからお話をうかがいました。

澤井亭は、澤井さんのお祖父さんが、明治45（1912）年に開いた寄席でした。当時、繁華街の寄席は昼夜2回興行でしたが、まち中の端席（はせき）は夜だけ1回。座席も少なく、近所の人しか来ない。一日働いて、夕ご飯を食べた後やお風呂帰りに来るのが、まち中の寄席でした。

澤井さんによると、昭和14（1939）年、日中戦争が長引いて不景気になり、また澤井さんのお父さんはあまり寄席に興味がなかったということで、さっさと止めてしまったそうです。

その後も、建物は壊さずに客席は店に、舞台は三つに分けて、住むところにしているとのことでした。

私は、この店の前を通るうちにだんだんとイメージが膨らんでいき、一度寄席をやってみたくなりました。そのイメージのままに書いたのが『からほり亭で漫才！』です。

主人公のおばあさんは私のつもりで、空堀に住む2人の女の子におばあさんの寄席再開のサポートをしてもらうといった、商店街の人たちとのふれあいを書きました。

●「からほり亭」で席主になる

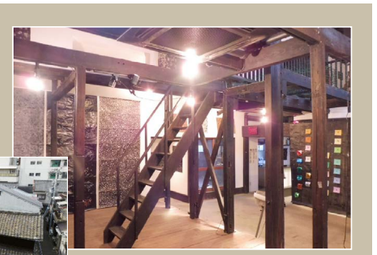
そういうふうに寄席の様子を一生懸命に物語で再現しているうちに、だんだんほんとうに寄席をやってみたいと思うようになったんです。

そんな頃に知り合ったのが、「りんりん亭りん吉」という当時小学校2年生の女の子でした。幼稚園の頃から、古典落語を覚えて、家族や親戚の前で演じていたところから、それが高じて、すでに落語会の前座とかでも出してもらえるほどにまでなっていました。

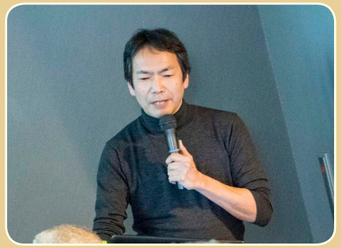
わが家の奥に古い蔵があって、そこを改造して畳も敷いて、重度の身体障害の方がまちに出てこられたときのお休み場として借りてもらっていたのですが、ここで一日だけミニ寄席をさせてもらったんです。「からほり亭」という名を付けて、提灯もあつらえて、一日だけの席主（せきしゅ）を楽しみました。

りん吉さんたち落語を演じる子どもたちはみなが古典落語をやって、小学生の漫才コンビは、お父さんが書いた台本で、日々の家庭の話、お母さんがこわいという話をやっていました（笑）。漫才は、子どもの場合もやはり日常の話なんですね。

よく、大阪の人間が二人寄れば漫才になると言いますが、父によりますと、実は反対で、大阪の人間が二人寄ったときの会話のおもしろさを、漫才が映し出しているということだそうです。私も、その通りやと実感しています。


「大大阪芸術劇場」は、藤田さんの家の裏の路地にあった明治時代の三軒長屋を改装したもので、現在フリースペースとして活用されている

■身体を通じて、ことばとのつながりを考える



塙 狼星 氏 （はなわ・ろうせい）
空堀ことば塾主宰

1963年生まれ。京都大学理学博士（人類学、アフリカ研究）。2006年から大阪市中央区で地域の子どもたちを対象に空堀ことば塾を始める。2014年には人智学に基づく教育と芸術の実践を目的とした空堀アントロコミュを設立。

●地域に根差した教育のかたち

私は、空堀ことば塾という、いわば空堀の寺子屋のようなところを運営しています。藤田さんのところの「大大阪藝術劇場」がある裏手の長屋に間借りをして、そこを拠点にして、小学生から高校生までの子どもたちに学校とは違うかたちで、地域に根差したような教育をと考えています。

目指しているのは、子どもたちの身体とか意識にリアルに作用するような教育。その意味から、伝統の芸能や文化を子どもたちと一緒に学ぶことを活動の主軸に据えています。

●多様性のなかにある力強さを

私は、以前、人類学の研究をしており、主にアフリカにフィールドワークで通っていました。そのうちに、生身の人間の力強さ、それから、ことばというものが持っている力、伝統とつながっていることから出てくる力強さというものの大切さを強く感じるようになりました。

その中心になるひとつの概念として、「半栽培」というのがありました。中央アフリカのコンゴ、熱帯雨林では、男たちが木を伐採して、そのあとに乾燥させて火入れをします。そこに、根菜、イモ類、またバナナやトウモロコシなども植えています。

そこは、日本人の感覚でみると、とても畑には見えない。日本の整然とした耕作地と比べ、あまりにも雑然とした畑です。ちゃんと整地して労働効率や土地の収益率を上げていくように管理すればいいのにと、日本人の考え方ではそうなる。ところが、調査を続けていくうちに、こういう、いい意味でのいい加減、良い按配で放置するということにも意味があるのだということがわかってきました。

畑の端の方には、ひこばえが生えてくる。畑のなかにも草がいっぱいあるが、当地の言葉には「雑草」というのがなくて、ただ草や木だったりする。つまり、「雑」という否定的な評価をしていないということです。結果的に数年経つと、いろいろな植物が生えてきて、やがて、15年から20年くらいで森が再生してくる。

これを、日本とは文化が違うと片付けるのではなく、ここで出されていることを肯定的に考えようとするなかで、私自身が感じ取ったのは、ある程度良い按配で残していく、手を加えすぎない文化というものの大切さでした。

完全には栽培しないという「半栽培」ですが、結果的にそこには多様な植物が育ち、それがいきいきと成長していく過程を見たわけです。

●日本の基層にある文化を大切に

日本に帰ってきて、子どもたちに教える機会もありました。その際、完全に管理化するというよりも、子どもたち一人ひとりの個性を認めて、その成長していく力、生命の力を育てるというのがとても大事に思えてきました。

人間の心というものは、太古から重層的で、古いメンタリティがどこかに残されています。それを日本のなかで考えると、日本では縄文から弥生にかけて、また古代から現代に至るまでの、先人たちが築き上げた文化を私たちは共有しています。新しいことを追い求めるのはもちろん大事ですが、もともと持っている日本人の基層になる文化というものを積極的に評価して、それを教育のなかにしっかり取り入れて意識化していくことが、一人ひとりの人間を強めていくのではないかと思うようになりました。

そして、空堀ことば塾をはじめたわけです。そこには、多様な子どもたちを受け入れ、できるだけ管理しないかたちで自主性を育てていく。かつ、できるだけ日本で、ここの場所なら、地域や上町台地が持っている文化を生のかたちで、子どもと半ば遊ぶようにしながら、伝えていくような場所にしたいと強く思い始めたわけです。

●森のような場所をつくりたい

そのバックボーンのひとつは、シュタイナー教育でした。ドイツのルドルフ・シュタイナーがはじめたもので、彼は古代から培ってきた叡智を現代の教育にどのようにつなげるのかの問題意識をもって教育に取り組みました。私も、先ほど言ったような関心と背景から、その勉強を続けています。

空堀ことば塾が最初にあったのは、空堀商店街の北の桃園公園横にある複合文化施設「萌」でした。最上階の屋根裏みたいなところでしたが、そこの二階には直木三十五の記念館があり、同館の人や地域の方々と一緒の活動もさせていただきました。それから、次に上本町西の路地奥の一軒家に移りました。そこでは、路地の文化に触れることになりました。地域の人と子どもたちが接するようになって、餅つきを一緒にしたり、芸能を見ていただいたりとか、温かく見守ってくださった。そして、そこから昨年の4月に現在の西賑（にしにぎわい）町に移りました。

アフリカ・コンゴにおける畑づくりの様子

空堀ことば塾の風景

百人一首に取り組みながら創作活動にも展開

ひとりで落語の高座に上がるのは貴重な体験

いずれも、いわば森のような、動物とか植物とかのいろんな生きものが集うように、子どもたちやお母さんたちが憩い、そこで手軽に本に触れ、日本が培ってきたことばにも触れるような場所をつくりたいと、そう思って活動しています。

●身体とことばはつながっている

塾の中では、落語と囲碁と百人一首は、活動の当初からずっと続けてきています。

田辺聖子さんが、日本の文化を勉強するには、百人一首をやればいいと書かれています。小学生の時はとにかく覚えて、中学生になったら意味を少し理解し、高校生になったら作家はどういう人物だったのかを当時の歴史も踏まえて勉強にしたらいいだろうと。そうすれば、日本のことばと文化を立体的に理解できると。実際、子どもたちも、続けているうちに、それぞれお気に入りの歌人ができたり、百人一首は関西の歌が多いので、そういう文化に触れたりもします。

落語の方は、主に冬から春にかけて、5分くらいのネタを一人ひとりが覚えて、高座に上るということをしています。高座に一人で上がるというのは子どもたちにとっては、ものすごく緊張すること。それを終えることで、通過儀礼というか、とてもさわやかな顔になる。

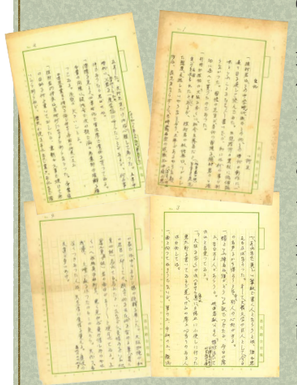
落語がいいのは、演者だけでなく、聴衆がすごく親切に笑ってくれること。そういう人との温かいつながりが子どもを強くしていく。また、囲碁は、上町台地の文化とは言い切れませんが、手談（しゅだん）と言って、指しながら、手を使って話をする。

これらの日本の伝統文化は、身体とすごく関係が深い。だから、学校で一般的な近代的体育をやるよりも能や狂言など演芸も含めて、身体を通じてことばとのつながりを考えることが、実際はとても大切だと思われる。それをやっていくと、子どもたちが、だんだんと自信をもっていく姿がしっかりと見てとれます。

そういう日本の文化の中の、いわば腹の座ったことばには、なかなか学校では出会わない。だから、そういう、しっかりと話す大人のことばを聞く機会を子どもたちに提供して、実際に演じて、身体とことばがつながっているということに気付いてもらいたい。その意味でも、上町台地というのは、すごく恵まれたインスピレーションを与えてくれる場所だと思っています。

肥田先生の上町台地 とびきりのもう一言 ❷

●学生時代の直木三十五



一柳安次郎の自筆原稿
直木三十五についての講演の心覚え

空堀から長堀通りを北に渡った坂道に榎木大明神がありますな。そのあたりで直木三十五は大きくなりはった。

直木は、大阪の市岡中学を卒業していますが、その市岡で、一柳安次郎という国漢の先生に教わった。

今の大阪市歌は「高津宮の 昔より ～」で大正の末に公募で選ばれたものですが、その前の明治時代からの「霞こめたり いこま山 ～」の作詞をされたのが一柳先生。

その一柳先生が、市岡の同窓会で直木のことをお話しされた。そのときに、先生が書きはった心覚えの原稿が4枚。これが私の手元に今あるんです。

私は、これを名古屋の永楽屋から買いました。『日本古書通信』ゆうのがあって、昔は、一流の古本屋がみなこの雑誌に広告を載せた。私はそれを長年見ていて、あるとき目録の中に、一柳安次郎自筆原稿、直木三十五を語るという内容に目が止まり、えっ、珍しいものがあるわと、注文したら送ってきたんです。

この先生は『漫録窓から』（大正12・1923年）という本を書いている。また、『上方』の第5号（昭和6・1931年）に大阪の落語家の思い出についても書いた。この内容がすごい。今、明治の大阪落語史を知ろうと思ったら、これが基本の文献なんです。

この一柳先生が言うには、直木は在校中は非常に寡黙な、もの言わん、ちょっとつんとした感じもある子やったそうです。漱石なども読んでいたようですが、将来、時代小説の巨匠になるとはとても想像できなかったと。

4年生のときに皆勤賞をもろうてるんです。まじめな生徒さんやったようです。良く言えば純真無邪気、ちょっと悪いふうに言うたら、負け惜しみのやせ我慢というのが直木の感じやったと。

卒業の前の年に、生徒会で講演して雄弁を振るった。その演題の大きいこと。「本年の卒業生の傾向を論じ、併せて帝国の将来に及ぶ」（笑）。

そういう人物ですが、のちに、深くつきおうた人は直木の気骨を感じて、菊池寛のようにほんとうの親身な友になったわけです。ということを一柳先生も結びに言うております。菊池寛が彼の逝去を悼んで直木賞をつくり、今もその名を残しているわけです。

肥田先生の上町台地とびきりのもう一言 3

●松屋町あたりの出版社

空堀のあたりは戦災にあいませんでしたので、澤井さんのところ（寄席・澤井亭）も残されました。

私は島之内生まれで、子どもの頃は、自分の小学校の校区内から外に出るというのは大冒険みたいな感じ。それで、空堀の方にはなかなか来る機会がなかった。九之助橋渡って、空堀の坂に差しかかったら、松屋町筋からの商店街の入口に餅屋がございまして、いろんな餅が並んでいる上に鏡がずっと並んでいる。下の餅が鏡に映って、店先がものすごく派手なんです（笑）。灯りが明々とともってね。そこまでしか、子どもときはよう来なんだですね。

空堀の西賑町は戦災でも焼け残った。大阪の中央部は全部戦災におうて、出版社なんかも全滅したけれども、西賑町に全国書房、三島書房というのがやっていてね。織田作之助の『猿飛佐助』や『六白金星』とかは三島書房から昭和21(1946)年に出てますな。三島はそのほか、藤澤桓夫の『大阪五人娘』、宇野浩二の『枯れ木のある風景』も出版しています。全国書房はちょっとハイレベルの本屋。戦争中は石浜純太郎の『浪華儒林伝』、その前は土橋真吉『河内先哲伝』なども出しています。空堀での、大阪の出版活動に見るべきものがある。その流れで、手塚治虫の『新寶島』があるわけですわ。手塚の処女作がここから生まれたと。これはたいへんなことなんです。

付記　『大阪の歴史』第69号（大阪市史編纂所 平成19年）に掲載された座談会「城南地域の再発見」でも、肥田先生は上町台地の文化について詳しく紹介されています。

会場のみなさまと“ことば”の交換

肥田　藤田さんのところが、長くおうちに伝わってきていた掛け軸や絵画、屏風の類を大阪歴史博物館にご寄贈なさっておられます。私も博物館で拝見しました。一級の江戸時代の絵画作品。大阪のご旧家は、昔はおうちごとにそういう作品をお持ちだった。その文化の水準の高いこと。大阪はそういうところでした。

橋爪　その藤田さんは、今「大大阪藝術劇場」というのを路地の建物を改装してやられてます。

藤田　あそこは、明治の中頃に建った長屋だったところです。壁は漆喰ですので、音の吸収はいい。ガラスも木もすべて昔のままなんです。昨年のクリスマスには、戦前のクリスマスレコード、このあいだは服部良一さんのジャズのレコードのコンサートをしました。暗いところで聴いていたら、何か昔の人も聴いているようですね。

会場1　大大阪藝術劇場はユニークなスペースですね。若手の落語家だとか、子どもを含めた落語の会などに使われたら、とてもいい感じだなと思います。

藤田　ただ、三軒の長屋をそのままぶち抜いたので、柱がたくさんある（笑）。来た人にじゃまだと言われます。でも柱取ると建物が倒れてしまう（笑）。不便なことを面白がって、使ってくださる人があればと思ってるんです。

塙　私たちも今度、大大阪芸術劇場で子どもたちの舞台をやらせていただくことになっています。

藤田　空間は広いので、子どもさんが使ってくだされば、わりと自信になると思います。人前で何かをするのはものすごく勇気がいるものですからね。

塙　子どもの落語では、何分も立ち往生してしまったりもします。失敗しても経験。それも間合いを学ぶいい機会になる。

橋爪　実は、藤田さんは大阪でパリ祭をしようと企んでいる（笑）。屋根の上になにか建てようとか。

藤田　凱旋門をつくろうとか言うてる人もいます（笑）。

橋爪　その上にエッフェル塔建てたら、まるで初代の通天閣です（笑）。

藤田　昔、うちの家は晒し蠟（さらしろう）をつくっていて、前の路地がちょっと場所が広い。そこが舞台になるから、そこでお祭りのときに、俄（にわか）芝居をやろうやないかと。俄というのは路地芸でもあり、素人が即興で面白いことをしたりする。でもまだ何も決まっていません。行き当たりばったり。

橋爪　ほんまに迷宮ですな（笑）。

会場2　直木三十五のことですが、先ほどの先生の原稿によりますと、ある事件を学校で起こし、それで父君を呼び出したということが書いてある。これは新事実ですね。それと、4年生のときに皆勤賞をもらっていますが、月謝は払ってないんです。それでよく皆勤賞が出たなあと（笑）。

会場3　空堀の路地で話されていた言葉ですが、文字になったものだけでなく、昔の話し言葉も残していくべきではないかと思います。空堀界隈の高齢の方の言葉なども録音で残していくようなことはできないのでしょうか。

藤田　今は、路地の言葉を話すお年寄りといっても、私が一番古いくらい（笑）。現実的には、もうちょっと難しいですね。

会場1　落語の古典は、言ってみたら上町台地のタイムカプセルみたいなところがありますね。上町台地を舞台にした落語はすごく多い。ただ、今の若手の落語家さんは、どんどん言葉を変えていくので、言葉を残していく点では難しいでしょうね。

会場4　船場言葉については、今も朗読会を開いている方などがいらっしゃいます。大阪は新町言葉、島之内言葉、船場言葉と、筋が違えば言葉が違うと言われましたが、いろいろきれいな言葉があるので、私もそれをなくさないで蒐集できたらいいなと思っています。

橋爪　画家の小出楢重は名随筆家でもあり、その随筆を、本人なら島之内言葉でどう話すのかということで、お孫さんにおねがいしたことがある。でも微妙に違うのだそうです。小出は東京美術学校に行ったので、東京風の言葉が入っている。芦屋に行くから、やがて阪神間の言葉も入ってくる。

会場4　反対に、阪神間には大阪の人たちが行かれたから、大阪の古い言葉がまだ生き残っているということもありますね。

橋爪　これはとても面白いテーマ。ぜひ研究してほしいですな（笑）。